

# 前近代社会における日本人の読み書き能力の実態に迫る！

横浜国立大学提供  
作成日 2016年 2月22日  
更新日



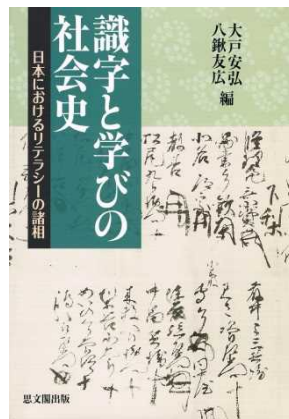
<b>研究者氏名</b> おおと やすひろ 大戸 安弘	<b>所属機関</b> 横浜国立大学 教育人間科学部	<b>関連キーワード(複数可)</b> テキスト、リテラシー、学び、自署、識字、書字、労働
<b>主な研究テーマ</b> ・前近代日本人の識字状況に関する実証的研究 ・リテラシーにおける中世・近世と近代 ・日本中世教育の遊歴的傾向に関する研究		<b>主な採択課題</b> ・基盤研究(B)平成27～31年度(配分総額:7,540千円) 課題名「近代化前後の日本におけるリテラシーの基盤的再編成に関する研究」 ・基盤研究(B)平成23～27年度(配分総額:13,910千円) 課題名「日本におけるリテラシーの歴史的形成過程と「学び」の変容に関する実証的研究」

## ① 科研費による研究成果

・リテラシーは、長らく文字の読み書き能力を意味する概念として捉えられてきたが、近年は情報リテラシー、科学的リテラシーなどと次第に拡張されて多用されることが多い。しかし日本の教育の歴史の中でどのような実態とともに生成してきたのか、不分明な部分が多く、その解明が求められてきた。ことにその基底をなす日本人の識字力は、すでに近世社会において国際的にみて同時代の最高水準に達していたとする捉え方が、複数の分野において強調される傾向がある。また、これを受けて様々な社会的場で指摘されることも多いが、その論拠は周辺状況の説明が多く意外に曖昧である。

・古代から中世・近世を経て明治初年に至る時間軸のなかで、会津・江戸近郊・五箇山・越前・近江・和歌山・九州などの地域性と個別性を意識した論証を行い、古代貴族の意外な一面や、中世・近世の民衆層の識字力の多様性やそれに基づく学びの豊かさを確認するとともに、それは均質的な広がりを持つものではなく、地域間の落差も大きかったことを明らかにした。

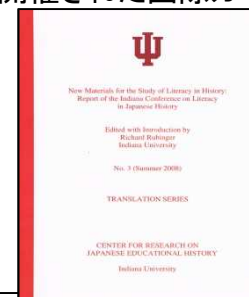
・7名の研究者による上記の共同研究成果は『識字と学びの社会史—日本におけるリテラシーの諸相—』(思文閣出版、2014年)として出版された。同書は、日本における識字の歴史に関する本格的な最初の著作である。これまで断片的に論じられてきた識字の展開過程が、はじめて実証的に検討されることとなった。



## ② 研究成果のその後の展開など

・共同研究を進めていく中で、リテラシー研究・日本研究に取り組む海外の研究者との交流がはじまり、その過程で2007年11月には米国インディアナ大学で開催された国際カンファレンスでのメンバー7名による研究発表が行われた。発表内容は冊子としてまとめられるとともに、同大のHPに公表されている。

(<http://www.indiana.edu/~easc/publications/crjeh.shtml>)



## ③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・近世のリテラシーが近代のリテラシーへと変容していく過程で、基盤となる人々の有する「学び」の意味がどのように変化していったのか、書字システムや労働状況の変化も含めて検討したい。

・『識字と学びの社会史』の英訳が米国で進行中である。出版されれば、日本教育史に関する学術書の欧文化の初の事例となる。2017年中の刊行を目指している。